

素朴だけれど、とても難解な
子どもの疑問に、著名人が答えます。

今月の答える人

太田哲也さん

レーシングドライバー・自動車評論家

プロフィール ● おおた てつや
1959年、群馬県生まれ。武蔵大学経済学部卒業。93年から
ル・マン24時間耐久レースにフェラーリで出場。98年、レー
ス中の事故で重傷を負う。壮絶なリハビリ生活を経てサー
キットに復帰。著書に、「クラッシュ」「リバーズ」(幻冬舎)な
ど多数。チャレンジする素晴らしさを伝える社会貢献活動「N
PO法人KEEP ON RACING」の代表を務める。

質

問をする君の心の奥底に、「いじめ
は完全にはなくならないかもしれないかもしれな
い」と思う気持ちがあるのではないかな。

もちろん、弱い者いじめは卑怯で醜い行
為だ。しかし残念ながら、「いじめはよく
ない」と言っただけでは、いじめの根絶は
なかなか実現しない。僕らの体には「いじ
めのDNA」が埋め込まれているのだ。

僕らの遠い先祖は常に食糧危機に直面し
ていたはずだ。生存競争に負けた部族や人
種がいた中でも子孫を残せたのは、自分と
異質な者を排除して勝ち残ってきたからだ。

あまり認めたくないけれど、僕たちは異
質な者を排除して自分たちと同種のもの
を守ろうとする本能が組み込まれている。

だから、相当意識して自分をコントロー
ルしていないと、気がつけば、いじめの当
事者になってしまう危険性があるのだ。

十五年ほど前、僕はレース中の事故で大
怪我をし、包帯を全身に巻いた状態で長期
間の療養生活を送った。外を歩けるようにな
ると、向こうから来る子どもの手を引い
たお母さんが、僕の姿を見て道を変えるこ
とが何度もあった。それは悲しかったけど、
いま、相手の気持ちを考えてみると、特別

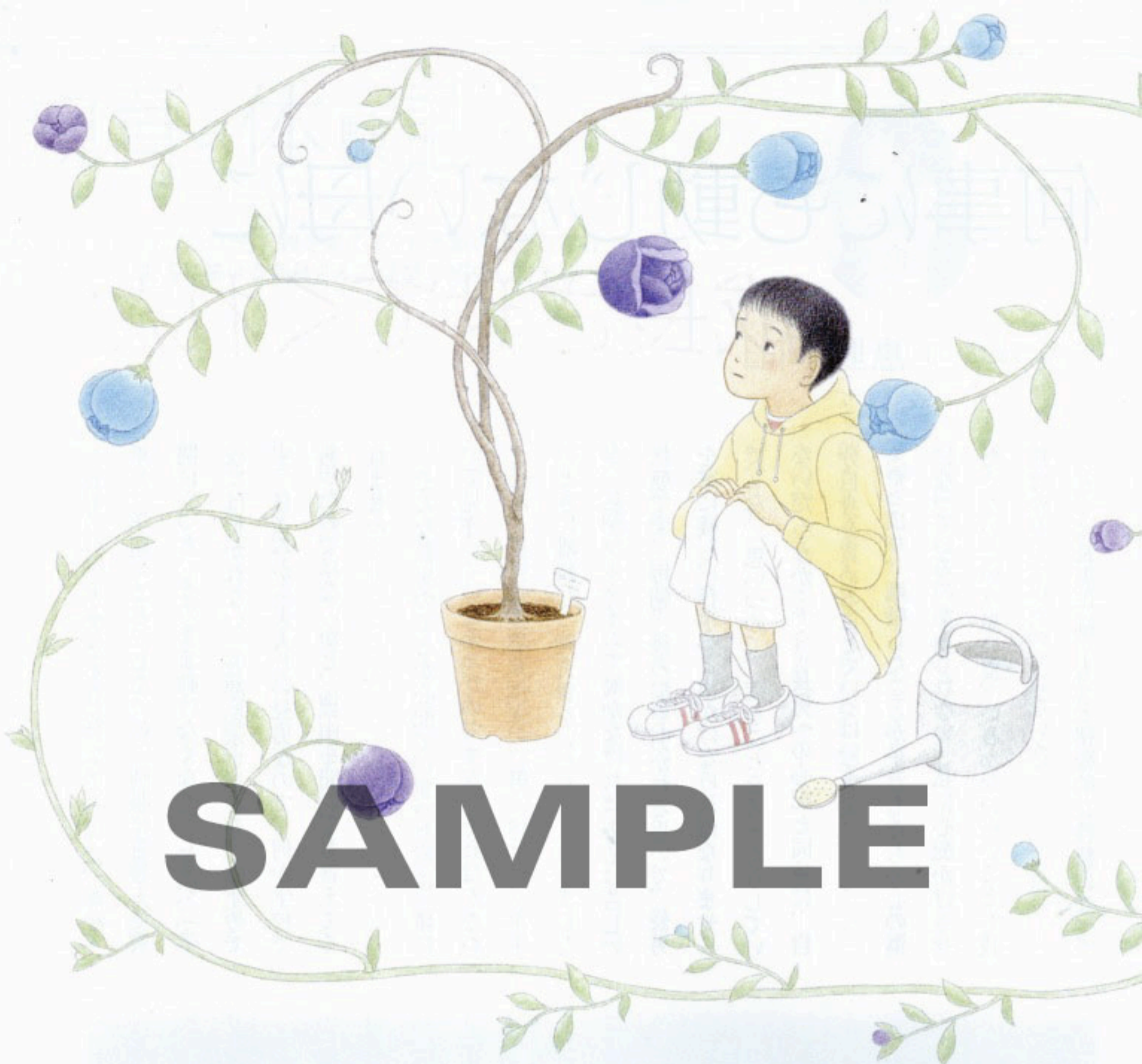
いじめめはなぜ

なくならないの？

(小学三年生・男子)

SAMPLE





SAMPLE

に僕を傷つけるつもりだったのではなく、
ついそうしてしまったのだらうとも思う。
人は自分とは異質なものを恐れ、避けたい
という本能がある。そこを忘れないことが、
いじめ解決のヒントになるように思う。

いま君に伝えたい大切なことの一つは、
「異質な要素はお互いに存在する」という
こと。それは、運動や勉強のできるできな
いや趣味などの違い、特技などの個人差だ。

例えば学校の運動会などで個人差をはっ
きりと出させない風潮があるが、本当は差
があつて当然なはず。それだけで人の価値
が決まるわけではない。むしろそれを、
「違つていてもいい。それもまた尊重すべ
きこと。違いは決して異常な事態ではなく、
ごく普通の状態だ。だから怖くもない」と
いう意識を持って心を開いてみれば、やが
て異質を異質とも思わなくなるだろう。

先生や親も巻き込んで、皆で考え方を交
えて、異質な要素に目を向け、互いに受け
入れる努力を続けたならば、いじめは減ら
していくことができるのではないかな。

どんな人にも態度を変えずに、誰にでも
フェアでありたい。「まずは自分とその周
囲の人たちに対してから」だよな。